

# 新川・西川立体交差

## —川と川の立体交差に隠された長い歴史に迫る—

【取材現場】新川・西川立体交差（新潟県新潟市西区）

【取材協力者】寺井 泰氏、川嶋 博之氏（新潟県 新潟地域振興局 地域整備部）

本連載の第2回は、新潟県新潟市西区にある「新川・西川立体交差」に注目します。川と川を立体的に交差させるといふ不思議な構造物を建設するに至った歴史的経緯や構造物の役割について、現在の管理者である新潟県新潟地域振興局地域整備部の方々に話を伺いました。

——新川・西川立体交差とはどのような構造物なのでしょうか。

新川・西川立体交差は新潟県新潟市西区に位置し、二級河川である新川の上を、一級河川である西川が鋼製トラス水路橋で跨いで流れ、立体的に交差しています（写真1）。西川が流れているトラス橋は「西川水路橋」と言い、橋長が約77m（トラス2連）、水路が幅4m、深さ1・5mの矩形断面となっており、1955年に完成しました。

——この立体交差はいつ生まれたのでしょうか。

新川・西川立体交差の誕生は、新川が人工河川として開削された江戸時代まで遡ります。立体交差の位置する地域は昔から西蒲原地域と呼ばれ、江戸時代には多くの潟湖が存在する低湿地でした（図1）。信濃川の支流である西川は、新潟港へつながる舟運路

や西蒲原地域の灌漑用水路としての役割を持つと同時に、鰻、田、大、三つの大きな潟湖の排水先でもあり、長年の土砂の堆積によって川底が周囲の土地より高い天井川となっていました。

そのため、降雨によってひとたび西川で洪水が起こると、より低地である周辺の耕地一帯に水が溢れ、排水ができない状況が続いていました。

この状況を打開するため、江戸時代中期に現在の新川を人工河川として開削することが考えられました。1732年から約80年間にわたって



写真1 現在の新川・西川立体交差（西川水路橋とその下を流れる新川）

9回も幕府への請願が行われましたが、新川の開削により、西川や信濃川の水量が減少して舟運へ影響を及ぼすことが危惧されたため、請願は認められませんでした。しかし、1800年代初頭に洪水被害が頻発したことから、1814年に長岡藩の伊藤五郎左衛門らが長岡藩、村上藩の52カ村を結集させて、新川の開削工事の計画を



図1 新川開削前の西蒲原地域 (提供:新潟県新潟地域振興局地域整備部)



図2 新川・西川立体交差の役割の変化 (提供:新潟県新潟地域振興局地域整備部)

戸時代の治水であるとは驚きでした。その後はそのような変化してきただけでしょうか。

江戸時代に西川に建設された底樋は、明治時代に入ってから使われていました。そのような中、1896年に現在の新潟県燕市横田地区で信濃川の堤防が約300mに渡って決壊する「横田切れ」という大規模な水害が発生し、西蒲原地域も18000ha

もの水田が浸水被害を受けました。この「横田切れ」を契機に、底樋を改修して排水能力を向上させることが検討され、1906年に県営工事にて底樋の大改修を行うことが決まりました。1909年から始まった改修工事により、れんがや花崗岩を用いたアーチ型の水路トンネル9門が建設され、1913年に「新川暗閘」として完成しました。この暗閘の建設により、新川の排水能力が向上するとともに、西川の舟運が確保され、西蒲原地域の農業が飛躍的に発展しました。

その後昭和20年代に入ると、新川は西蒲原地域の水田整備が進んだことで排水量が年々増加する一方、新川暗閘の建設から約40年が経過し、土砂の堆積によって流水が妨げられる状況も生まれたため、暗閘を改築する必要が高まりました。また、時代とともに舟運から陸上輸送へと変化したことで、西川も農業用水としての役割が中心となりました。このような背景から、1954年に農林省(現在の農林水産省)直轄の国営事業として、新川暗閘を撤去し、鋼製トラスの水路橋である「西川水路橋」を新たに建設することとなりました。

現在の西川水路橋は1955年に完成し、新川・西川立体交差としては3代目になります。時代とともに新川と西川の役割も大きく変化しており(図2)、現在では用排水や治水の役割だけでなく、人々の親水環境を作り出す役割も担っています。

**取材を終えて…**

川と川の立体交差として誕生した「新川・西川立体交差」には、江戸時代から続く長い歴史が隠されており、治水や用排水などの面から建設された構造物であることが分かりました。今では、小学校のテストで新川・西川立体交差の役割に関する問題が登場したり、2020年の開削200周年に向けて地域の方々を中心に新川の歴史を伝える活動が行われたりするなど、地域で愛着を持ってもらえる存在になっているのだと感じました。

(担当編集委員…小澤広直、池谷風馬)